

研究資料

『児童問題』の著者・野口樹々について

On the Life of Kigi Noguchi

泉 順\*

Jun Izumi

はじめに

私たち児童問題史研究会が編集した『日本児童問題文献選集』（日本図書センター刊）は昨年（1985）初めその刊行を完結した。36巻をⅢ期に分けて刊行したその選集は、児童問題の今では入手困難な名著の復刻である。明治から昭和戦前期までを対象にして文献を選定した。私はその中の野口樹々（きぎ）著『児童問題』の解説を担当した。『児童問題』は、戦前、三笠書房から刊行された「三笠全書」のなかの一冊。三笠書房では、その少し前に、「唯物論全書」50冊程を刊行していた。「三笠全書」は、それに続けて企画・編集された全書であるが、出版社の刊行の辞によれば、創業満5周年を記念して「ここに現代学術の普及のため」本全書を刊行したのだとある。したがって「科学・哲学・経済・産業・文学等のあらゆる学術分野における各々の中心的テーマを包含していることを確信して」いるともうたっている。

ところで、著者の野口樹々は、どのような人物か。野口に関しては、比較的最近児童史研究家の上笹一郎（かみ・しょういちろう）氏が、「児童史の散歩道」という連載（雑誌「家庭教育」、家政教育社刊）のなかで「児童史名著の幻の著者——『児童問題』の野口樹々と『人身売買』の本庄しげ子——」として触れておられる。（1983年2月号）

それによると、野口樹々は、伊東三郎と野口昌夫の共同の筆名である。上氏は、この事実を、菅忠道氏（故人、児童文学評論家）から教わり、それなら学生時代にエスペラント語について伊東の講演を聞いていたという事実を明らかにしつつ、教育研究家としての伊東をもっと高く評価すべきだと述べておられる。しかし、上氏は、野口に関しては面識もなかったし、その論説のなかでも、特に新しい資料には触れておられなかった。

\* 社会福祉学専攻

実は、私も伊東とは、一応の面識があったし、伊東の死後刊行された遺稿・追悼文集『高くたく遠くの方へ』（土筆社、1974年刊）を入手していたから、前記復刻の解説のうち、伊東に関わる部分については補足的に取材をすればよい、と思っていた。勿論、それとて私にとっては容易ならざる仕事であったが、より困難は野口昌夫に関してであった。児童史研究家の上氏さえ、特に新しい資料を提示出来なかったとすれば、野口を追跡する事は、殆ど不可能を意味するよう<sup>に</sup>思われた。そんな思いを抱きつつ、さしあたり伊東の取材に足を運んでいた。

しかし、私にとっては、思いがけない経緯から野口を知るチャンスが巡ってきた。伊東の遺稿・追悼文集（以下、文集と略す）を出版した土筆社の吉倉伸氏から、文集の筆者の一人であるエスペランチストの小原孝夫氏を紹介して頂いた。伊東は戦前からのエスペランチストであったから、その方面からの取材をしておく必要があると思っていた。そこで、吉倉氏に適当な方の紹介をお願いしたからである。小原氏を訪問して、種々お話を伺っているうちに、伊東と小原氏とは、戦後、交友関係が生じたのに対して、野口とはそれ以前、つまり戦前の交友関係である事が判明した。小原氏の語る所によると、『児童問題』の著者については、伊東の口から共同の筆名であること。結果として伊東が一人でそれを執筆した旨を伊東から直接に聞いて驚いたことなどを伺った。つまり、小原氏は、戦前、組合活動を通して野口を知った。伊東とは、戦後、エスペラント語の学習を通して交際した。伊東とのふとした話し合いから、筆名にかかわる事実が伊東より語られ小原氏は驚かれたという訳である。

その取材の折、野口夫人が今尚ご健在であることを知り、すぐにも伺いたかったが、高齢で病床に伏されることが多いので、面会は無理だろうとのことだった。また、小原氏は、私と初対面であった故であろう、野口に関しても今あまり詳細に語りたくないという意向を示された。ただ、自分（小原氏）としては、野口に関して何か記録しておきたいと思っていたから、これを機会に野口夫人から詳しい来歴などを聞き出しておくことにしよう。したがって、野口に関する情報提供はそれまで待つてほしいということで取材を終わらざるを得なかった。そこで、私としては野口夫人が健在であるという事実の紹介のみを解説に記し、あとは、その後見出した伊東の一文——「児童問題研究」（日本子どもを守る会内児童問題研究所刊行の雑誌）に野口の来歴について若干触れている文章に頼って、一応私の責めを果たした訳である。

小原氏は、70才を越える高齢のため、私の取材後身体を悪くされたり、また、他の用事もおありになり多忙であった。それに伴って約束のメモを拝見しつつ、お話を伺う時期もずれていったが、昨年夏頃、「野口夫人から来歴などについてお話を伺ったから秋になったら話に応じてよい」とのご連絡を頂いた。

そこで、私は、11月のある日、小原氏を訪問した。

以上で明らかなように、本稿は、前記『児童問題』の解説に記述したい願望を抱きつつも記述しえなかった内容を補足する意味の研究資料である。『児童問題』の著者は、事実上伊東三郎一人であることを考慮すると、野口の来歴に関しては差程触れなくてもよいのかも知れない。しかし、戦前、社会運動に関わった方の来歴などについて、機会があれば可能な限り事実関係を明らかにしておくことが今後の研究上、大切のように思える。それより何より、私としては野口の来歴の詳細を知りたかった。以下は、小原氏を通して知りえた野口像である。

1

**小原** 貴方は、どういう視点で野口昌夫を、実際はこの本（『児童問題』）の著者でもないのに、調べようという気持ちになられたんですか。

**泉** 『児童問題』の著者は野口樹々で、これは伊東三郎と野口昌夫の二人を合体したペンネームですが、お二人とも既にお亡くなりになっていて、なぜ二人で一人のペンネームにしたのか、樹々という名にはどのような意味が込められているのか、または込められてないのかなどについて、ご本人たちからはもう伺えません。したがって、そのような事実関係を明らかにしえないまでも、お二人の歩みや業績——伊東さんについては優れた遺稿集が刊行されていますが——を記録しておくことが今後の研究のために必要ではないか。それが私の第一の意図です。

第二は、お二人の歩みのなかで、いつどこでどのようにして接点が生じて、この本を共著としてお出しになろうとしたのか。それが判れば、この著書を理解するバック・グラウンドがさらに明確になり、本書理解の上で一層役立つように思うからです。煎じ詰めますと、その二つのためにお話を伺わせて頂きたいとお伺いした訳なのです。

**小原** 伊東三郎と私が懇意にしていたことは、前にお話ししましたね。

**泉** 伺いました。

**小原** それというのも、間に野口樹々という人があって、樹々の名前で伊東さんが『児童問題』を書いたということが、彼との話の間で分かって双方ともびっくりしたんですけども、それで余計伊東さんと交友が深まった訳なんです。しかし、今考えてみますと、もう少し伊東さんに野口さんのことを「聞いとけばよかったな」と悔やまれるんですけどね。しかし、どうもそういう個人的な面——どういう経路でどうなったかというようなこと——は、やはり昔からの左翼の仲間でのしきたりといったら可笑しいんですけど、なんということなしに、根掘り葉掘り聞くといったようなことは、やはり遠慮すべきものだというあれがあるんですね。それで自然聞かず、相手が信用できる人物、人柄だとか、そういったようなことが基準になって、そういう点まで掘り下げるといことは、いつの場合もないんですね。それで、亡くなってからとか、現在の状況にあんまり患わされない時期になった折に、関連の文書でも見れば、ああ、ああいう方だったのか、じゃあこういう関係があったんだな、というようなことが推測されるというようなことで済んでしまうことが、昔から多いんですね。

**泉** 多分、そうだろうと思っておりました。その意味では深く事実関係をですね、とやかく調べたりしない方がいいのかなあと思います。ただ、もう、或る意味で「博物館入り」——と言っちゃあ申し訳ありませんが——でしょうから、その意味で、もしお差し支えなければ……。

**小原** 私も、もう満で77才——2, 3日前になりました。ですから、昔のことを書き留めたいという希望があるんです。貴方からお話しがあったのをいい機会に、野口さんの奥さんにいろいろ聞き質して、それを書き留めておきたいな、と思っています。また、貴方からのお話の他に昨年（84年）、北海道の岡野正という人が、いろいろのことを聞いてきているんですよ。エスペラント関係、それから全協（日本労働組合全国協議会）関係ですね。かなり詳しく聞いてきたんで

すが。そういうようなこともあったもんですから、これは一つ纏めておいた方がいいかな、と思って。岡野さんが、なぜ私に直接そういうことを聞いてきたかという、私が野口さんなんかと仕事をしている当時、私の手伝いをやってくれた学生がいた訳です。稲垣という人ですが、その彼が、慶応（大学）を出て、東京経済大学の事務局かなんかにずーっとおられたようなんですが、私の下にいた当時のことを何か書いたらいいですね。そこに私の名前が出ておったんです。——私は、それを全然知りませんでしたけど——それで岡野氏は私に聞けば当時のことがいろいろ分かるだろうというわけです。手紙を見た限りでは好感のもてる方だと思いましたから、懸念なしにお話できるという気がしたんです。それで、手紙では委細はつくしきれないから、出来たら上京していらっしゃいませんか、お目にかかりましょうと行ってやったんですが、なかなか上京の機会はないんですね。2、3手紙の往復があったきりで、その後何もありません。

話を戻しますと、私は、中学から一橋（大学）へ行っただけです。一橋に行ったときに、一年先輩に大変な運動家が出たんですが、これが学校を出るとすぐもう左翼運動に入ってしまった、何か真偽の程はわかりませんが、モスクワにクートベ（東洋勤労者共産主義大学）ってありましたが、クートベに行って、出て帰ってきてから多分党の首脳部の一員になったんでしょ。若いですけど、全協を指導する立場にあったかどうか知りませんが、それに近い立場にあった伊藤友猪（ともい）というのがおったんです。この人が私の所へ——私は、一橋を出てから勤めてましたが——働きかけてきたんです。私も学生時代からその人を知っていましたからね。社会科学研究会などでも顔を合わせていましたから。彼のひきで全協＝日本労働組合全国協議会の一般使用人組合に入った。一般使用人組合というのは、銀行、生命保険、一般の商社、病院、学校＝教員組合もそれ以前は独立していたけど入ってきました。

私は、一般の組合活動というよりも調査部の仕事——その当時私は、ただの銀行員というだけで何の根ももっていませんでした。調べるといことは昔から好きだったもんで、調査部の仕事をやったんです。そのうちに、あの頃は、弾圧が厳しいですからどんどんひっこ抜かれていくんです。それで、半年もしないうちに一般使用人組合の調査部の責任者にさせられたんです。そのうち、全協の中央部もどんどんひっこ抜かれる訳ですね。全協中央部の調査部の部員に推薦される——欠員が出たということで回されたんです。その時のキャップが野口昌夫だったんですね。彼が全協中央調査部のチーフだった訳です。その頃は、昭和7～8年ですね。あとになって判ったことですが、当時中央部には有名な「松原」といったと思いますが、スパイがいた訳ですね。

全協の仕事をしている時、いろいろな人と接触があったんですが——それを語るとなるとコンガラガりますから後でふれるとして——。

地方組織のレポート送達先のアドレスをどこか提供してもらえないか？ という野口氏の要請で私の知っている一橋の学生のアドレスを、本人の了解をとって——シンパだった学生がいましたから——提供したんです。ところが、その学生がとっ捕まるんですね。富山の方だったと思いますけど——富山の方がやられて東京の連絡先＝アドレスが分かっちゃうんです。こっちは、ちっともそれを知らずに野口さんがいつも行っている一定の連絡場所に行って受け取ることになっちゃったんですが、その時たまたま少し前に私が野口と街頭連絡して会った訳ですね。「これから…」(Nという青年だったんですが)「N君からのレポートを受け取りにいくんだ」という話で、

「じゃあ、僕もしばらくN君に会ってないから行ってみようかな」と言ったら、「ああ、一緒にこいや」という訳で行ったんです。

それが四谷の塩町の喫茶店。入った途端に、その青年が真正面の入口が見える所に座ったんですが、青い顔色をしていて、普通の健康体と思えなかったんですが、なんかオドオドした感じなんです。「あれ？ おかしいな…」と思うと、その辺にいるお客さん——ちょっと喫茶店にそぐわないような人達がいるんですね。いかにも、左翼運動の連絡でもとっているようなメモなんかとって、チョッチョッと上目使いで私たちの方を見るんです。「こりゃあ危険だ！」と思うと、野口氏もピーンときていた訳ですね。「こりゃ、長居は無用だ、すぐ出よう」という目くばせをして、さーっとそこから出たんです。その前に学生に「どうも暫くだったね、変わらないか？」と私は声を掛けたんです。「ハァ……」とかなんとかいって、元気の悪い返事をしたんです。出ました途端に、喫茶店に7～8名もの客をよそおった刑事がいたんですね。それが一斉にイナゴのように飛びかかってきて、ガンジガラメになっちゃったんです。まあ、夕方のことですから、市電は止まるは、通行人は止まるは、そこで2人共ファン縛られて手錠掛けられ、タクシーに乗せられて、それで青山の警察署——貴方の書かれたのに出ていますね、1933年5月——に検挙された。それから、彼は、青山警察署→四谷警察署→豊多摩刑務所→小菅刑務所へ行ったんです。

そんなことがあったんですが、私はともかく共産党員ではなかったものですから（その前にも引張られているのですが）私は運のいい男で、脅かされるだけで釈放されちゃったんです。まあ、泳がしておくというつもりだったんでしょうネ。

私の親父も非常に心配しましてね、当時、警視庁に毛利特高課長という有名な課長がいたんです、泣く子も黙るといわれた……。毛利特高課長の親友を私の親父が昔世話したんですね。北沢という建築課長なんです。工学博士でね。その人のところへ親父は、さっそく飛んでいったらしいのです。

#### 泉 警視庁の建築課長？

小原 建築課長です。毛利課長に話してくれる訳ですね。捕まってから三日目には本庁から刑事がやってきて、約1時間半近く取り調べを受け、それきり青山署の手を離れてしまったのです。始末書つまり、手記を書けということ——もう運動は致しませんという一札を入れて10日目には釈放になっちゃうんです。

その前、最初にやられた時は何のことでしたか、ちょっと忘れてしまいましたけど——そんな時も刑事が「お前の所を調べた。以前、お前の住んでいる隣近所を皆聞いて回ったが、なかなか親孝行もんで評判だ」という。此処（現住居）にくる前——当時、青山に10年住んでいましたけど。

刑事は「親に心配をかけるのは、非常にまずいことじゃないか？ お前みたいな青年をあたらすポイルするのはかわいそうだから、とにかく親孝行に免じてブタ箱にぶち込まないからよく考えろ！ そして、お前の連絡している連中たちをこっちへ引き渡せ。何もお前と取引する訳ではないけど、お前は連絡さえすればいい。連絡した後、お前に会って別れてからその人間を捕まえるから余計な心配はせんでいい。その代わりお前をブタ箱にもっていかない。それが約束できないというのなら仕方がない。正規の方法でお前をドロを吐くまで完全にとっちめる。」という訳

です。「いや、分かりました。」と言って、全然デタラメの場所——神田の小川町の連絡場所——を言ったんです。来っこありませんよね。「貴様、嘘をついたな！」と。向うもちゃんと張ってましてね。「お前、来ないじゃないか?」「いやいや、向うでも、何か都合があって来ないんじゃないか。この次の連絡時間は、これこれで……」と、その時まで待ってもらいたい、と。その時、待ってくれることになった。もっともらしい事をいうから、私を一応信用したんでしょう。もちろん、来っこないですよ。それで、とうとうぶちこまれちゃったんですよ。でも、こいつは大した事ないと思ったんですよ。だから、泳がせるという事で、また、すぐ出してくれた。

そんなことがありましたから、家でも分かっている訳。そんな事で、その後、此処（現住地）へ越してきてもう50年余になります。その頃、この辺は、まだ田舎だった。

泉 すると、一回目に検挙された時は、学生時代ですか、社会に出てからですか？

小原 社会に出てから5年目です。私が学生の時、大塚金之助さんを頭にした社会科学研究会があったんです。S. P. S——フランス語で社会科学研究会の頭文字をとったんですね。そんな所へ顔を出したりしておりましたからネ。まあ、あの当時、一橋でもっとも尊敬していた大塚さんのお弟子では、小椋広勝さん。当時すでに有名な人でした。彼も亡くなりましたネ。彼ともいろいろ交渉がありました。よい方でしたよ。大塚さんの所へ伺ったこともあります。

昔の話になるとキリがない程脱線するんです。

野口昌夫と非常に親しい新田目直寿（あらため・なおじゅ）という人がいました。全協で鉱山の方を担当していました。この人は、平田良衛の義兄なんですよ。平田さんは、岩波文庫のレーニン著『何を為すべきか』を翻訳した人です。それから、憲法学者の鈴木安蔵という人。彼も新田目さんの従兄です。

泉 小原さんが、全協の一般使用人組合に入られたのは、大体何年頃でしょうか？

小原 私は、足掛け3年やったと思うんです。その頃、3年というのはたいへん寿命が永いとされたんです。ともかく次から次へと引っ張られてしまいますからね。昭和6～7年から、野口氏とやられるまでですね。

泉 そうすると、お勤めになって2年程して全協の一般使用人組合にお入りになって……。

小原 そうなんです。僕は、普通の人と逆なんです。学生の時やったけど、勤めると、止めちゃうのが大部分ですね。私が運動そのものに強い関心を抱きはじめてそのきっかけは、実際社会に入ったその年（1929）の10月ニューヨークで株式の大暴落が勃発したことです。これが導火線となって地球上の全資本主義国は有史以来、最大規模の世界経済恐慌に見舞われることになったのです。体制は根底からゆすぶられました。わが国では、これらの脱出口を戦争政策に求め、昭和6年（1931）には満州侵略が開始されたのです。私は、この恐るべき危機に革命的労働者階級の一兵卒として運動に参加しなくてはいけないと考えるようになったということなんです。

泉 そうすると、野口さんと接触されていた期間というのは、ほんの1年か2年位の短期間？

小原 そうですね。そうなんです。

泉 野口さんという方は、どんな方だったのですか？

小原 一緒に仕事をした期間は短いけれども、刑務所へ入ってから出て来て、それからずーっと再検挙されるまでお付き合いしていた訳ですから。これは、私としては得難い友人だ、と。普

通の学校友達だとか、そういったのと違って、そういう極限された生活での親しい関係は、私の非常な印象というとおかしいんですけど——私を強く促えた人なんですよ。刑務所へ入っている間、奥さんを通じて本の差し入れ——統計学を勉強したいというので、統計に関する本を大分差し入れました。私は、自分でやれるだけの事は致しました。それで、出てきてからもちょいちょい会いましてね。いろんな話し合いをやるんですよ。当時の国際情勢だとかを……。

泉 前にお伺いした時、ポーランド問題でもって、野口さんとの間で意見がちがって……？

小原 大抵の事なら、そんなにぶつかることはなかったんですが、私も意外だったんです。しかし、今になってよく考えてみると私の方が間違いだったかもしれないんです。独ソ戦争が始まる直前で、ナチスはポーランドに無警告で進入したでしょ。それを私は仕方がない、と。独ソが協定して、ヒトラーが半分を占領し、半分をソ連が占領した。彼は、もうカンカンになって怒る訳ですよ。「けしからん。社会主義国のとるべきやり方ではない」という訳ですね。帝国主義と何等変わらないではないか、と。そういうことを言っても、ああいう場合はね、型通りにはいかないだろう。要するに、ソ連としては、ヒトラーという気違いを相手にする以上それ以外に方法はなかったのではないか。だけど、あれは絶対に認められんという訳ですよ。しかし、今考えてみると、ソ連のスターリンのやり方は極めて大国主義的やり方だったことには変わらないですな。

泉 ですから、そのお話を伺いまして、原則的にしっかりしたマルキストだったんじゃないかという印象が私には強く残っていて……。

小原 彼の出獄後、お付き合いが続いたことの一つに、私は絵が好きなんです。油絵を描いて、まあ一つは、韜晦（とうかい）の意味もあったんでしょうが、もともと好きな油絵を本格的にやったんですよ。野口氏も絵が好きなんですね。俺にも描かせろという訳で、私の油絵の道具を貸して絵を描きはじめて訳ですよ。それで、描いたのを一部お目にかけましょうか？（と、絵をとりに行く）昭和13年に、今の家内と結婚したんですがね、そのお祝に描いてくれたんです。昭和12年3月と書いてありますね。（実物を見せながら）街の風景なんですね。全然好きで描いているわけですから、絵の技術としてはそううまい方ではないですが、自由画と思えばいい訳ですね。

泉 雰囲気が、昭和初期の東京の街並——開け始めた地域の街並という感じがしますね。野口さんが、出獄しておいでになってお付き合いをする時には、もう全協関係の組合の仕事という関係ではなくて、個人対個人のお付き合い……？

小原 そうです。

泉 野口さんには、お子さまがいらっしまった……？

小原 ええ、娘さんがおります。奥様は、その娘さんと一緒におられます。娘さんのお婿さんとお孫さんが二人位いるんですかな。相模大野におられます。もう83才ですか奥さん。今度貴方におめにかかっているいろいろお話ししたことを、暫く御無沙汰していますから、そのうち行って、もし健康が許せるんだったらですね、貴方もお会いになってみられたらどうですか？

私の調べた彼の来歴を申し上げますか。

2

野口昌夫は、1901年（明治34年）7月15日、大阪市北区絹笠町8番地に生まれる。父は彦五郎と言いい内科医で医院を経営。佐賀・鍋島藩の士族出身。父の生年月日は不明だが、1903年1月21日死去。昌夫が1才半のときだった。大阪の阿部野に墓がある。昌夫の妻はちやうというが、ちやうが1968年（昭和43年）、現住所の相模原市に移住した後、大阪市の北区役所に照会して父の死亡年月日が判る。

昌夫の母は、八重。生年月日は不明、昭和52～53年頃死去。八重の父は主計少将・吉田某と言って東京都の出身。旗本の出身とか。八重は、夫・彦五郎の死後二人の息子を育てるために産婆の資格を取得したいと思い、金沢の医学専門学校へ入学（当時、八重の実父が金沢連隊に勤務、昌夫を伴い父の許に身を寄せる）。しかし、親戚の強い反対により断念。後に親子程も年齢差があり、当時貴族院議員だった工学博士・石黒五十二（いそじ）と再婚させられた。石黒は、赤坂区表町の高橋是清の屋敷横の道を下ったところに邸宅を構えていたが、戦災をうけて焼失。それから、八重は鎌倉市小町に移り、昭和52～3年頃青山の高樹町で亡くなった。石黒との間には、子ども二人をもうけたが、一人は戦死、一人は病死したとのこと。ちやう（以下、野口夫人と記す）は、戦後、八重が鎌倉に一人住んでいる折、二度ばかり訪ねている。八重は、先夫の没後再婚の意志はなかったが、親戚に強く要請され止むなく再婚したんだとよく語っていた由。

昌夫には郁夫という兄がいた。2才年上＝1899年（明治32）生まれ。若い時から絵描きになりたいと家出をした。だが、ついに絵描きになれず、1983年頃堺市において84才で死去。

昌夫の祖父は、秀允（ひでみつ）。生年月日は不明、1895（明治28）9月3日死去。麴町の紀尾井町に居住していた。

昌夫には、姉・節子がいたが、1896年（明治29）12月1日に死亡している。生後間もなく死亡か？ 母は八重。祖父秀允、姉節子と昌夫の3人の墓は青山墓地——乃木將軍の墓のちかく——にある。

祖母のさわ（秀允の後妻）については、生年月日は不明、没年は1932年（昭和7）3月26日。

昌夫が生まれた頃の野口家の家族構成は祖母のさわ、彦五郎、八重、郁夫、昌夫の五人であった。彦五郎の死後、前記のように八重が再婚したので、祖母＝さわが二人の遺児を育てた。

後見人は、菊池常三郎であった。菊池は、彦五郎の姉の夫、つまり彦五郎の義兄であった。昌夫達はこの菊池家に引き取られた。菊池は、西宮市に住み、軍医総監の経歴を有していたが、退官後、西宮で回生病院を開業、院長となる。菊池としては、二人の遺児を将来医師にするつもりのものであったが、それは実現しなかった。父・彦五郎の遺産は、明石か須磨に1万坪の土地があった由。

1908年（明治41年）小学校へ入学。（校名は不明）1915年（大正4），神戸一中へ入学。腸チブスを患い、1年休学したので、卒業も1年遅れる。

1917年（大正6）神戸一中3年生の時、後見人の菊池は学校から呼びだされ、「昌夫の抱いている思想に問題がある。他の生徒へ悪影響を与えるから注意してほしい」と指示される。しかし、



その後一向に改まる様子もなく再度菊池は呼び出される。そこで、菊池は、このまま神戸一中に在校させておいてはダメだと思って、自発的に退学させ、郷里・佐賀県の佐賀中学校で校長をやっている親戚のものがいるので、そこへ頂けた。そして、佐賀中学校の4年生に編入させられた。

1919年（大正8年）佐賀中学校の4年生を終了して、佐賀高等学校へ入学。高校に入り寮生活をするようになると、親戚の校長の監督から解放され自由自在の生活がおくれるようになったため、撚りを戻してしまう。武者小路実篤が非常に好きで「種蒔く人」に心酔したらしい。つまり、大正デモクラシーの波にのった新しい書、文学書を涉猟、学校生活にまったく魅力を失う。

ところが、そうした頃後見人の菊池が死亡する。そのため、学資の仕送りが円滑でなくなる。そんなこんなで中退を決意。それが、1920年（大正9）。

以後1922年（大正11）までの足取りは不明である。

1923年（大正12）、種ヶ島で小学校の代用教員になるが、これについては、山田六佐衛門との関係がある。いかなる事情で山田との結び付きが出来たのかは不明だが、ともかく山田と非常に親しくなって、彼の出生地である種ヶ島へ山田とともに代用教員になるべく赴任する。山田の追悼集『濁流を悠々と一山田六佐衛門とその時代』（山六会刊、1981年）によると、1923年、つまり関東大震災の年の8月頃山田は東京に出ている。そして、震災に遭遇してから、また、種ヶ島に帰っているが、その折に野口を連れていったのかもしれない。とすると、野口も在京していた訳である。震災の折、大杉栄が殺されるが、それを残念に思って二人が企画して教員を集めて追悼集会を開催したという。それが町当局にばれて、「島はじまって以来の最大の不祥事」ということで二人とも代用教員をクビになる。そこで、野口は暫く山田の実家あたりに寄宿し、その後佐賀へ帰りそこから京阪神に出たようである。

1920年（大正9）、野口は前記の如く佐賀高等学校を中退するが、その時期は、徴兵検査を受ける時期と重なっている。野口は、徴兵検査を受けにかなかった。早速、憲兵隊から厳しい調査があったが、前記のように後見人が軍医総監だったのと、もう一人の叔父も軍医監であった。そんな訳で内々に処理して貰い、お叱り程度の処罰で済んだ。詳しい経緯は判らないが、種ヶ島から帰った後、一年志願をして兵役の義務を済ませてしまったらしい。

1925年（大正14）、京都で軍医監をしていた叔父の野口詮太郎（せんたろう）を頼って、京都市立医大のレントゲン研究所の研修生となる。そこを終了後、レントゲン技師となる。（勤務病院名は京都府立か市立か不明）

1927年（昭和2）、日本共産党員になり、組織活動をはじめめる。

1928年（昭和3）、いわゆる三・一五事件で検挙される。野口夫人によると他の党員より遅れて検挙されたので、その間に重要書類の始末をした由。

1931年（昭和6）10月高松刑務所を出所。祖母さわに「私の目の黒い間、運動はやらんでくれ。」と泣きつかれて運動から離れ、祖母と生活する。

1932年（昭和7）3月26日、祖母さわ、死去。葬式後上京する。

1932年（昭和7）に全協調査部で働きだす。

1933年4月19日、逮捕される直前、新目田ゆき（前出の直寿夫人）の関連で鈴木ちやうと結婚する。住まいは東京・四谷の谷町の金窓家に間借りした。

(この後、5月に検挙され、警察署と刑務所を転々としたことは小原氏の話のなかで触れてあるので省略する。)

小菅刑務所にいる間、俳句や詩をよく作ったという。夫人によると——「赤とんぼ やあ暫くぞ 辞儀をせい」「獄衣着る 我にも似たる 赤トンボ」

「霧の朝」という詩——朝、霧の中にジャガイモの花が咲いているのを見て作ったという。

1936年(昭和11)、小菅刑務所を出所。そこで、銀座に事務所を開いて、「児童作品」という雑誌刊行に着手。それは進歩的教員の協力を得て、小学校教員を対象に、児童問題を扱った雑誌だった。だが、半年も続かず、数号刊行して潰れる。小原氏は「児童作品」を貰って見た記憶がある由。絵など子どもの作品を集めて掲載し、表紙は当時吉祥寺在住の独立美術の中堅画家に描いて貰っていた。小原氏はその画家と面談し議論したことがあったという。また、「児童作品」の事務所は、銀座の松屋の裏手当たりにあったと記憶している由。その後、大河内正敏所長の理化学研究所に勤務。小原氏は、日比谷の「美松ビル」にあった理研の事務所に野口を何回か訪ねたという。だが、やがて野口の履歴詐称がバレる。左翼運動をしたことを履歴書に記載してなかった。また一方で、役員と意見の合わないこともあって面白くなく、辞職を迫られた訳ではなかったが、野口は退職する。

1938年、野口37才の時、矢島建設に入社。社長は矢島萬助と言ったが、ふとっ腹でかっ達な人間だったらしく、野口の事情をよく理解して亡くなるまで面倒を見たそうである。矢島建設には、野口の親戚の三井信託銀行の社長・松井和宗の口利きで紹介されたという。

1943年(昭和18)、野口は箱崎署に検挙される。野口の同志に清水省三という人物がいた。ミノファーゲン(社長・宇都宮徳馬)の九州の責任者として福岡にいた。清水が逮捕され、清水との関係で平という人物がいたが、彼も同時に検挙される。(後、獄死)清水氏の繋がり東京にいた野口氏も検挙される。共産党の再建の陰謀に加担していたということだった。小原氏の所へ夫人から連絡があったが、「おかしいな？」と小原氏は思ったという。普段の言動からしてそんなことを考えているとは思えなかったそうである。小原氏はその検挙をデッチ上げによるものと判断している。それを気にしつつも、小原氏は1944年(昭和19年)4月13日に召集される。数えで36才の兵隊(小原氏)は中国で警備兵として、また司令部で勤務した。

終戦後、1946年(昭和21)3月末、野口と会うのを楽しみに小原氏は帰国する。戦災のため野口夫人の住所もわからなかったが、やがて夫人からハガキを貰い、会ったところ、1945年(昭和20)3月5日に野口は死亡したことを知らされる。夫人の話によると、博多の刑務所に収容されていた野口の身体は肺を侵されていたので長生きの見込みがなくなる。足腰も立たなくなり、当局より連絡がある。刑務所内では、戦時中のことなので、十分療養できないので、夫人は「自分が看取りたい」と願って1944年(昭和19)12月31日出所させて貰い、矢島建設の建築現場の寮(長崎県彼杵郡宮村南風崎)で療養するも死亡した。(享年43歳)

小原氏から伺えた野口に関する来歴は、ほぼ以上の如くであった。若干不明点は残るものの『解放のいしずえ』(解放運動犠牲者合葬追悼会世話人会編、1956年)や伊東の書いた野口の簡単な来歴だけでは伺い知れなかった部分が判然とし、明確な野口像が浮かんできた。今後、さらに資料その他の発掘を続けより鮮明な野口像に迫りたい。それにしても、小原氏と野口夫人の全面的な協力なしに、ここまで明らかにできなかった。ここに心からの謝意を表する次第である。(1986. 3.18. 記)